The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大江健三郎「他人の足」論 ： 「人間」という陥穽と「書く」こと
Author(s)	福田, 涼
Citation	語文. 2024, 122, p. 67-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98211
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大江健三郎「他人の足」論

――「人間」という陥穽と「書く」こと――

福田　涼

一、はじめに

大江健三郎は、初の著書である単行本『死者の奢り』（文藝春秋新社、一九五八・三）の「後記」にこう記している。

僕はこれらの作品を一九五七年のほぼ後半に書きました。監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが、一貫した僕の主題でした。（略）

ここには『飼育』などの中篇の系列と『他人の足』をふくむ短篇のそれとを収載しました。僕が日本の学生の消極的、否定的側面を強調するという批判には、人間の積極的、肯定的側面をえがくのにふさわしい小説型式、長篇を書くことでこたえたいと思います。

ここに示されているように、出発期における大江の小説には、閉鎖的な環境ないし状況下におかれた少年や青年たちの様子が、しばしば記述されている。表題作「死者の奢り」（『文學界』一九五七・八）が第三十八回芥川賞の候補となった際、「参考作品」に挙げられたことでも知られる「他人の足」（『新潮』一九五七・八）も、そうした小説の一つである。当該期の受賞は逃したものの、選考委員から[1]「他人の足」は、「うまい短篇」（中村光夫）、「コントとしては優れた構成と香気をもっている」（石川達三）、「巧緻な短編」（丹羽文雄）、「なかなかユーモラスな小品」（舟橋聖一）などと、総じて好意的に評されている。ただし、本作の「構成」の面での分かりやすさは、後述のとおり、本作に装填された批評性の射程を、かえって見誤らせた向きもあろう。また、「好んで奇異穢悪の題材を採ったのにも何らの必然性は認めにくい」（佐藤春夫）など、「死者の奢り」を含め、その「異常な題材」（川端康成）に抵抗感を示した評者も存在した。

これらの同時代評と同じく、「他人の足」の評価や解釈に小さくない影響を与えてきたと考えられるのが、江藤淳が『死者の奢り・飼育』（新潮文庫、一九五九・四）に寄せた「解説」である。

江藤は、大江のいわゆる「監禁状態」について「時代的にいえば一種の閉塞状態であり、存在論的にいえば「社会的正義」の仮構をみぬいたものの一種の断絶感である」と論じていた。

柴田勝二は「他人の足」の大江が「生活の改革を訴える学生の肩を持っているわけではなく、むしろ怠惰な快楽に耽る少年たちの側に立って、彼らと学生の対立を描いている」とする。柴田によれば、この作品には大江の「閉じ込められることを受容する心性」とともに「左翼的な色彩を帯びた人間に対する疑念や否定」[2]が表れているというのである。また、中村泰行も本作から「実存主義的主人公によって、進歩的学生が「見張」られ、その「贋もの」性が見抜かれる」という構図を読み取り、「作者」は「進歩的人間に対する実存主義者の道徳的優位性」[3]をうったえているとする。

柴田と中村の論は、主人公である「僕」と「学生」との関係に、政治的な立場の二項対立及び、いずれか一方の「勝利」を読む、という点において共通している。言葉を換えれば、両者は「左翼的」「進歩的人間」である「学生」の言動に、「社会的正義」の「敗北」というアナロジーを見るのである。だが、こうした解釈は作中に記された「勝利の感情が湧きおこりかけて、急に消えた」という「僕」自身の述懐を無視した上でしか成り立ち得ない。イズムや立場の優劣をめぐる二項対立は、小説の終盤において、むしろ解消されているのである。

このように本作については、江頭の「解説」を嚆矢として、しばしば「政治」に関わる問題が議論の俎上に載せられてきた。しかし、いささか奇妙なことに、いずれの論においても、「一種の強制収容所」という本文中の言辞が孕む政治的な問題については、言及が回避されてきた。

この他の論考として、たとえば石川巧は、本作の大江が意識したという「『病牀六尺』等の子規の言葉」を参照しつつ「物語世界の細部」の読解を試み、「テクスト内にあって、「僕」が体験した様々な感情の振幅も、結局は〈内部〉に抱え込んだ空白に向けられた自慰的な煩悶でしか」なく、「誰もいない病床に繋ぎとめられた生活の苦しみをこぼした子規がそうであったように、「僕」もまた固い「壁」のなかで無為な時間を生き続けるしかない」[4]と結論づけている。また高橋由貴は、テクストの精読を通して「もはや自己の内面に沈潜してしまうことはできず、かといって「僕ら」という集団に溶解したり他人と合一・一体化することもできず、自己を抱き込もうとする抜きがたい他者との接触の中で絶えず距離を見出すといった、常に自己の〈外部〉に晒される「僕」のあり様」[5]を浮き彫りにすることで、従来の批評が初期の大江作品に見出してきた「自己完結の至福状態」[6]とその破綻、という主題の相対化を試みている。近年では、四方朱子が「この短編の語り手が脊椎カリエスの当事者の一人称視点である」ことに着目した上で、「「障害者」と「性」」という視座に立つときに浮き彫りとなる「時代性とテクストの構造そのもの」に由来する本作の「差別性」[7]について論じている。

このように「他人の足」をめぐる論点が多様化するなかで、しかし未だに解釈が固定化しているのは、作中に叙述される一連の出来事が終わった時点での「僕」のありようである。従来の研究では、「「僕」の〈意識〉は、外部から学生が来る前と去った後とを比較すると、全く変化をきたしていない」[8]、あるいは「学生が去ったあと、残された僕は外部を拒絶し快楽を求める心性と、回復しないこと、外部とつながり得ないことを意識し絶望するという二つの心性を持ったまま苛立ちながら生きる」[9]といった指摘がなされてきた。すなわち、「粘液質の透明な壁」によって「外部」から閉ざされた状況に甘んじる「僕」の受動的な姿勢が、本作からは見出されてきたのである。

しかし、右のような見解においては、一連の叙述が「僕」によって、まさしく「外部」に差し向けられたものである、というテクストの位相が見失われている。本作の帰趨を検討する上で問われるべきは、「不思議な監禁状態」の中で「おとなしく暮らしていた」筈の「僕」が、「壁」の「外部」に向けて言葉を発するまでに至った、そのモメントであろう。

以上の問題点を踏まえつつ、本稿ではテクストの精読を通じて、「外部」が闖入することで生じた「一種の強制収容所」の住人たる「僕」および「僕ら」の変化をより明確に跡付けるとともに、「僕」によって叙述されたテクストの位相――とりわけ「政治」に関する批評性――を明らかにすることを試みる。

二、「人間」への固執

小説は次のような一節によって幕を開かれる。

僕らは、粘液質の厚い壁の中に、おとなしく暮らしていた。僕らの生活は、外部から完全に遮断されてい、不思議な監禁状態にいたのに、決して僕らは、脱走を企てたり、外部の情報を聞きこむことに熱中したりしなかつた。僕らには外部がなかったのだといつていい。壁の中で、充実して、陽気に暮らしていた。

ここでは「カリエスの子供たち」[10]である「僕ら」を取り巻いていた状況、すなわち「不思議な監禁状態」の内実は、まだ示されない。右の文章で語られているのは、「僕ら」が「外部から完全に遮断されてい」たこと、言葉を換えれば「僕ら」が内部で「完全に」自足していたということである。

とすれば、右の叙述には、事後的な認識が介在していることになろう。「外部」を持たぬ往時の「僕ら」にとって、「僕ら」という集団意識は、明確には形成されていなかった筈だからである。また、彼らに「外部がなかつた」以上、彼らは自分たちが「監禁状態」に置かれている、という認識さえも、実は所有していなかったと考えられる。

彼らに「僕ら」という認識がもたらされる契機となったのは、「学生」なる存在が「粘液質の厚い壁の中」へ闖入してくるという出来事であった。彼は「大学の文学部」にいたが「両脚をだめに

しちやつた」こと、そして「三週間たつて、ギプスを外してみて、どうなるか定まる」のだが「きつと、だめだろうと医者がいつて」いたことを「低く細い声」で「僕」に語る。だが、既に「お互いの病状について話したり聞いたりすることに、飽きあきしていた」という「僕」は、まともに受け合わない。

やがて「学生」は、彼を「いつも清潔にしておきたい」という看護婦[11]によって「羞恥」と「屈辱」の底に陥れられる。看護婦が退出したのち、彼は「曖昧な声」で、同室の「僕」にこう述べる。

僕は犬みたいな扱いを受ける、と学生がいつた。僕は子供の時、犬を発情させて遊んだ事があるけど、今発情させられるのは僕だ。

「学生」は自身が「犬みたい」な存在、つまり非人間的な存在であるかのように扱われることに耐えられない。そこで彼は、「結局、ここで回復しなければならないのは、正常さの感覚なんだ」、「僕らも正常な人間だという確信なんだ」という認識に基づき、「日常の誇り」を齎すべく、翌朝から「彼の運動」を始めるのである。

高橋由貴は、「彼の運動」が従来「〈政治〉的範疇で解釈されてきた」ことに違和感を表明し、彼の言動を「実存的企て[12]」と解している。ここで「政治」と「実存的企て」を明確に区別し得るかは疑問だが、学生の「運動」が彼の「実存」にとっても逼迫した問題を孕んでいることは確かである。「正常さの感覚」や「日常の誇り」を失いかけているのは、「両脚をだめにしちやつた」彼自身にほかならない。彼にとっては、たとえ「欺瞞」と評されようとも、自らが「正常だと考える」ことは切実な意味を有しているのである。左の叙述は、このことを端的に物語る。

誰にだつて正常な生活は魅力があるし、誇りも回復するんですよ、ね？　そうでなくちゃ、社会が成立しないと思うんだ。君も僕らのグループに入ればいい。

傍点を付した箇所が示唆するとおり、おそらく「学生」本人も、おのれの発言に「確信」を持つことはできていない。しかし、というよりも、だからこそ彼は「正常」という言葉に執着するのである。

この後、「僕」と「学生」との、見かけ上の対立が次第に顕在化してゆく。ただし両者は、「僕」に関しては「左翼新聞」の報道に関する冷徹な論評と、「自分の言葉に、最も激しく絶望的に腹を立ていた」との言辞が示すように自らが「正常でない」ことを強く意識している点において、思考の地盤を共有している。石川巧も指摘するとおり、「僕」は「本質的な意味では学生と「対立」などしていない[13]」のである。

ここで注目したいのは、右の「学生」の言葉を裏打ちする、ひとつの主体意識である。「学生」は誰もが「正常」さを希求し、「誇り」を保持していなければ「社会が成立しない」という。では、「正常な人間」であるという「確信」や「誇り」を持たぬ者は、「社会」において、どのように扱われるというのか。先の「犬みたいな扱い」という、彼自身の言葉を思い起こそう。彼の論理を敷衍すれば、「正常な人間」であるという「誇り」を有しない存在は、

彼が「子供の時」に「発情させて遊んだ」対象である犬と同様に、人間の「社会」の周縁に配され、管理の対象として遇されて然るべき、ということになろう。

この「正常な人間」という概念は、看護婦が「自殺未遂の少年」に対して「執拗」に呼び掛ける内容とも関連している。

ねえ、勇気を出すのよ。そして手術をなさい。お母様が泣いて頼んでらしたじゃないの。ねえ、勇気を出しなさい。男でしょ?（略）

ねえ、勇気を出すのよ。病気は直さなければならないものよ。あなたは、歩かなきゃならないのよ。人間は歩くようにできてるでしょ。ねえ、勇気を出すのよ。

看護婦が述べるところによれば、「勇気」を持たぬ者は一人前の「男」としては扱われず、[14] また歩くことができない人間は「正常な人間」としては見做されない。[15]「正常」「勇気」、「人間」、これらの諸概念が一つに結び合うとき、それは鞏固なイデオロギーとして作用するだろう。

学生が病棟に来てから三週間が経過したある夜、「学生」は「僕」に弱音を吐く。当日の朝、彼は医者から、彼の両脚が「もういけないらしい」ことを宣告されていた。「僕」は「学生」に対して初めて「優しい感情」を抱く。ところが翌朝の「僕ら」は「お互にぎこちなかつた」という。

学生は僕に弱音を吐いたことを、非常に恥じている様子だつた。そして、学生はその日から、彼のグループの活動にもつと熱中し始めた。

このように「学生」は、「正常な人間」としての「誇り」や「男」らしさを恢復せんとして「活動」により一層熱中する。かような「学生」に対し、療養所の少年たちは、はじめは「軽い興味」を惹きつけられ、「少しずつ」誘導されてゆく。そして、彼らは「かつて看護婦から得ていた衛生的な快楽、日常的な小さい快楽を棄てさ」るに至る。ただし、末尾の叙述を先取りすれば、彼らの変化は「近頃、皆少し変だつたじゃない?」「なんだか変だつたわよ、近頃ずつと」と見做される程度のものでしかない。「長く単調な時間を生きている」彼らにとって、「学生」の「運動」とは、つまるところ恰好な退屈凌ぎの材料に他ならなかったのだ。

なお、「学生」が主導する「運動」の一つが「原水爆禁止のための声明文を新聞に送りつける事」であった点は、本稿の議論にとって示唆的である。ジョルジュ・バタイユは、ジョン・ハーシー『ヒロシマ』（クノップ社、一九四六・八）の書評で、同書から「彼〔＝広島流川教会の牧師であった谷本清〕は意識をはっきりもって絶えず自分にこう言い聞かせねばならなかった。これは人間なんだぞ、と」というくだり[16]を引用した後、次のように続けている。

こうした物語の全体から浮かび上がってくるのは、これら不幸な人々によって維持されていた人間的な振る舞いが、動物的な朦朧状態の根底の上でかろうじて続いていたという事実である。[17]

これに関連して、大江の『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、一九六五・六）には「放射能によって細胞を破壊され、それが遺伝子を左右するとき、明日の人類は、すでに人間でない、なにか異様なものでありうるはずである」（エピローグ 広島から……）[18]と綴られている。本書の「Ⅳ」章が「人間の威厳について」と名付けられているように、大江にとって「ヒロシマ」をめぐる運動は、原爆によって剥奪された「人間の威厳」を取り戻すための闘争として認識されていたと考えられる。

ただし大江は「人間」という概念や、それに対する信頼が最悪な政治的状況を招来しかねないことにも注意を向けていた。トルーマン米国大統領らが原爆投下を決定する際、たとえ原爆が広島の人や街に致命的な打撃を与えたとしても、「人間的な力」をもってすれば回復は可能であるという「信頼」の情が、背後にあったのではないか、と大江は「想像」する。

これから自分が手ひどい打撃をあたえる敵の《人間的な力の信頼》、襲いかかろうとする犠牲羊のもっている、自分で自分の後始末をする能力への、狼の信頼。これは僕がヒューマニズムをめぐっていだく、もっともみにくい悪夢だ。（Ⅴ 屈服しない人々）[19]

こうした「《人間的な力の信頼》」を、大江は「徹底的な卑劣さにかざられたヒューマニズム信仰」[20]と呼ぶ。「人間」という主体意識、あるいは「人間性」という概念が、「政治」に直結することの危うさが、ここでは判然と指摘されている。こうした『ヒロシマ・ノート』の議論を、先行テクストたる「他人の足」に直ちに敷衍することはできまいが、「人間」や「ヒューマニズム」という概念に拘泥することの陥穽が浮き彫りにされている点で、これらのテクストは響き合っているのである。

村上克尚は、大江の「奇妙な仕事」（『東京大学新聞』一九五七・五）を論じる過程で、次のように指摘している。

ファシズムは、集団の同一性を脅かすものを、無視＝殺害可能な動物と規定する。ファシズムは、この境界に基づいて、想像力の流れの統括を行う。ここから、自分が属する集団への熱狂と、他の集団への驚くべき冷淡さが説明される。[21]

このように「ファシズム」[22]という政治状況においては、「集団の同一性」を把持するために、社会的な弱者や他の集団の成員が、「人間」として主体化される以前の存在、すなわち「動物」のごとき存在と見做され、あるいは排除＝殺害の対象となる。「人間」や「人間性」に固執することの陥穽は、ここに潜んでいる。「他人の足」の「僕」と「学生」は、次のような会話を交わしていた。

戦争だつて？ と僕は驚いていつた。僕らは、そんなものに関係ないぜ。

関係がないなんて、と学生も驚いた声を出した。僕と同じ世代の青年が、そんなことをいうなんて考えてもみなかつた。等しく「純粋戦後世代」に属する青年同士における、こうした見解の相違は、同時代に顕在化していた「戦争体験」の問題[23]について考慮する上でも示唆的ではあるが、今は措く。ここでより重

要なのは、「学生」の「平和のため」と自称される一連の政治的な「活動」が、広義の「ファシズム」的煽動――大江自身の言葉を借りれば、「あいまいに閉ざされているために、しだいにリアリスチックな判断力や分析力が衰退したあげく、持続的なエネルギーもうしなって怒りっぽく非論理的になった若い精神の行きつくところは、おおかれ少なかれファシズムにつながる」[24]――に転落してゆく可能性に、「学生」本人が自覚的でないという事実である。このような側面に着目するとき、「戦争」に「関係がないなんて」と驚く学生自身の発言は、アイロニカルに響かざるを得ない。

ただし、冒頭で確認したとおり、本作において相対化されているのは、こうした「学生」の言動ばかりではない。そのことは、次の叙述からも窺うことができる。

午後になつて、自殺未遂の少年は、学生たちの快活な励ましに送られて、サンルームを運び出されて行つた。手術する勇気が出たのだろう、と僕は考えた。あいつらの馬鹿さわぎも、すつかりむだな訳ではないな。

傍点を付した箇所が端的に示しているように、ここで「手術する勇気が出たのだろう」との推測は、あくまで「僕」一人のものに過ぎない。少年自身のありようは「送られて」、「運び出されて行つた」と、いずれも受身の表現でもって描出される。彼の真意は定かではなく、[25]したがって肯定的に記述されているかに見える「快活な励まし」が、少年にとっては、むしろ同調圧力として抑圧的、ないしは暴力的に作用したという可能性を否定することはできないのだ。このように、「戦争」に「関係ないぜ」と断言する「僕」もまた、「あいつらの馬鹿さわぎ」、すなわち「自分が属する集団への熱狂」（村上前掲論）に潜む陥穽を見過ごしてしまうのである。

三、萌え出づる「希望の芽」

とはいえ「学生」による「運動」が、「僕」を含めた療養所の少年少女に、いくばくかの希望を齎すものであったことも確かであろう。ここで注目したいのは、「この病棟にいる唯一人の少女」、すなわち「いつも花の栽培の本だけ読んでいる少女のカリエス患者」である。従来注目されてこなかったことであるが、彼女がまさしく「いつも花の栽培の本だけ読んでいる」点は重要である。植物は「足」を持たず、自らの意思では移動することができない。それでも、根生いの場所で美しい「花」を咲かせる植物は、少女にとって憧憬の対象であったと考えられるのである。

彼女は「妹が優しい兄を見つめるような眼で、学生のよく動く唇を見つめ」、学生の寝椅子に片手をかけていたという。やがて「学生」と少女、二人の唇は触れ合うことになる。

夜明けがた、ギプスの音を鈍く響かせ、学生が上半身を起して少女に接吻した。唇の触れあう、濡れた柔かい音がした。僕は優しい感情に充たされていつたが、その奥に、押しあげて来る怒りの感情もあるのだ。

ここで「睡眠薬を取り出すために腕を動かすこともできない」

「僕」は、鈍い「ギプスの「音」と「唇の触れあう、濡れた柔かい音」を耳にする。「僕ら」すなわち少年たちが享受する「手軽な快楽」から隔てられたこの少女は、ここで初めて少年たちが看護婦の「濡れてぶよぶよしている唇」によって与えられる「手軽な快楽」とは全く別種のエロスを体験する。彼女は、病棟という場に縛られてありながら、なおそこで得られる「希望」を、我が身をもって感受するのである。

かような少女と「学生」のありように対し、「僕」は「優しい感情」を抱きつつも、その奥には「押しあげて来る怒りの感情」が存していたという。この「怒り」は、彼らに「賤民の団結」や「不具者の助けあい」の「みじめ」さを見ることに起因しよう。「僕らこそ、手を繋ぎあつて、一つの力になる必要がある。そして、病院の外の運動と呼応するんだ」という「学生」の呼び掛けを、激しい剣幕で峻拒していた。

僕は誰とも手を結ばない、と僕はいつた。僕は立つて歩ける男とは無関係だ。そして、僕と同じように歩けないで寝ている連中、彼らは僕の同類で、執拗に躰をこすりつけてくるし、僕らは同じ表情、同じ厭らしさを持つている。僕らは彼らと手を繋ぐのも断わる。

これを聞いた「学生」は「不服そうな顔をしながら」も黙り込まざるを得ない。彼はその後も「僕は君にも、グループに入つてほしいと思つている」と暫く勧誘を続けるが、「僕」は「孤立」を貫くのである。

接吻の翌日、「学生」は診療室に運ばれて行く。少年たちは「サンルーム」で「低く合唱」しながら「学生」の帰りを待っていた。彼らの歌は「高い天窓のあたりへ上つてゆき」、栄養を含んだシャワーのように「ふりそそいで」来る。そして「僕はそれを聞きながら、うつらうつらしていた」という。

ここには「サンルーム」という場所で、まさしく「陽の光」を浴びる、植物のような少年たちの姿が描き込まれている。先に触れたとおり、彼らは「犬」を発情させる如く与えられる「日常的な小さい快楽」を棄て去っていた。少年たちと、同じく植物に擬え得る「唯一人の少女」は、このとき等しく「カリエスの子供たち」として存していたのである。

そして急に少年たちの歌が止み、「僕」は「広い窓ガラスの向うを見た」。

診察室の開かれたドアの前の青く光る芝生の上を、臆病な動物の仔のように、学生がゆつくり歩いていた。僕は胸をしめつけられた。（略）

拍手が起つた。僕は少女を含めて、カリエスの子供たちが皆、幸福そうに拍手しているのを見た。（略）感動が喉にこみあげた。あの男は、僕らの周りの、厚い粘液質の壁に罅を入れ、外への希望をはつきり回復したのだ、と僕は喉を燥かせて考えた。

こうして「僕の心の中で、小さいが形の良い、希望の芽」が育ち始める。これまで連帯を拒絶していた「立つて歩ける男」と、手

を繋ぐことが、ここで初めて熱っぽく夢見られているのである。

四、「動物」への逆行

「僕ら」の期待に反して「学生」はなかなか帰って来なかった。少年たちは話し疲れ、「ぐったりした表情」で、「しかし熱心に待ち続けていた」。「僕」もまた「辛抱強く待ち続けた」。ところが、事態は「僕」や少年たちが思うようには運ばなかった。

そして、サンルームのドアが開き、柔らかい空色のズボンをはいた学生が戻つて来た。(略)学生は曖昧な、固い表情をしていた。なにか、うまく行かない、しこりのようなものがあるのだ。こんな筈はない、と僕はせきたてられるように考えた。これはどうしたのだろう。あの男はよそよそしい。自分の足の上に立つている人間は、なぜ非人間的に見えるのだろう。こんな筈ではなかつた。

「人間」という主体意識を把持すべく振舞っていた「学生」が「自分の足の上に立つている人間」――「正常」な人間――としての自己を回復した途端「非人間的」に見えるという逆説が、ここには叙されている。「学生」は「ためらいを押しきるように胸をつき出し、こわばつた微笑を浮かべて」、少年たちの許に歩み寄る。一人の少年が、「ね、君の足に触らせてくれないか」と「おずおずした声」で頼むと、「学生」は「意識した快活さで少年に躰をよせた」。

少年は、最初指で学生の腿にふれ、それから静かに両掌でそれを支え、こすりつけた。少年は執拗にその動作を繰返し、やりなおした。僕は少年が口を半ば開き、眼を瞑つて熱つぽい息を吐いているのを見た。

石川巧が指摘するとおり、少年のこうした振舞いや仕草は「オナニスム的」[26]な要素を多分に含んでいる。このとき「学生」の「人間」としての全体性は看過され、夢想や羨望の対象としての彼の「足」というごく一部の器官が、フェティッシュとして消費されるのである。[27]

これに対し、「学生」は「急に躰を引き」「よしてくれよ、よせつたら」という「邪怪な声」で叫ぶ。ここに描かれているのは「執拗に躰をこすりつけてくる」かつての「同類」への生理的な次元での拒否反応である。

ここで注目すべきは、思惟を裏切る身体の他者性が、他の場面でも示されていたということである。

ほら、ごらんなさい。ほら、と看護婦は、学生の下腹部を見おろしていつた。あなたは正直じやないわ。

いくぶん猥褻な印象を齎す記述であるが、ここでも「学生」の身体＝下腹部は、彼自身が命ずるところに反した作用を示している。先の場面に戻って考えるならば、ここでも彼の身体は、「学生」自身の思考を裏切り、彼が「正直じやない」ことを暴露する。その意味で、少年の両掌でこすりつけられた彼自身の足は、まさしく「他人の足」にほかならない。そして「学生は皆から拒まれ、自分の下肢に支えられて胸をはつていた」。

そこに現れるのが、「学生とそつくりの、強靭で下品な顎を持つている」中年の女である。「学生」の母と思しきこの女は、サンルームの入口から「横柄に僕らを見まわし」ながら「タカシさん、早くいらつしやい、タカシさん」と彼を呼ぶ。「このテクストの登場人物たち」が――「左翼新聞」には「皆の名前まであるわ。活字で、きちんとよ」との記述が見受けられるにも拘らず――「殊更個性を与えられることがない[28]」なかで、「学生」には例外的に「タカシ」という名が附与され、更にその外見が描出されているのである。

野口武彦は『万延元年のフットボール』（『群像』一九六七・一～七）を論じる中で、大江が「自分の生み出した執拗なイメージの群れにいかに偏執するか」という点に注意を促し、「性的暴力の時限爆弾を内部に埋蔵させてその生涯を疾走する鷹四の前身には、すでに『叫び声』の「怪物」強姦殺人者の呉鷹男がいる[29]」と、本稿の議論にとって瞠目すべき指摘をしている。『叫び声』（『群像』一九六二・一一）と『万延元年のフットボール』とを結ぶ「鷹」の系譜に着眼するとき、「他人の足」の「タカシ」はどのような存在として捉え返すことができるだろうか。たとえば、彼はこう語っていた。

僕は今日、アジアの民主主義国家が、世界の動きに対して、どんな意味を持つかを中心に、説明したんだ。誰一人、毛沢東を知らないんだからなあ。僕は、僕らの会を《世界を知る会》という名にしようと思うんだ。

右のような「世界の動き」を鳥瞰的に捉えようとする志向や、「自由」への希求、そして彼が着用する「空色のズボン」など、彼は少なからず鳥のイメージを髣髴させる。そして、彼が母親と思しき「中年の女」と共有する「強靭で下品な顎」は、弱者を捕獲する動物＝猛禽類の暴力的なイメージを露わにしている。こうした強者の暴力が「人間」という主体意識と結合するとき、それが「犬」の如き弱者に対する抑圧として機能することは想像に難くない。

このように「学生」という登場人物については、身体の描写や呼称といった細部からも、一見穏やかで「単純」とも思われる彼の言動に潜む暴力性を剔抉することができるのである。彼はもはや「臆病な動物の仔」ではあり得ない。

「皆から拒まれ」た「学生」は「脣を歪めて」療養所の「外部」へと歩いてゆく。「ドアを閉ざす時、学生が僕に訴えかけるような弱よわしい視線をむけたが、僕は冷淡に顔をそむけた」。「ひどく遅れた昼食」の後、少女は「サンルーム」を離れ「個室に引籠」ってしまい、「僕」もまた個室へと退き下がる。

結局、僕はあいつを見張つていた。そして、あいつは贋ものだつたんだ、と僕は考えた。勝利の感情が湧きおこりかけて、急に消えた。

こうして「厚い粘液質の壁の罅」は「癒合」し、「暗い拡がり」が静かに躰を寄せて来る。「小さいが形の良い、希望の芽」は明るい陽光から遠ざけられ、療養所には「あの聞きなれた、卑猥な忍

び笑い」が復活する。少年たちは、皆「手軽な快楽」を施される「犬」のような存在へと逆行してゆく。そして「僕」もまた、自らの下腹部に看護婦の「乾いて冷たい掌」が「荒あらしく触れ」るのに任せるのである。

五、「書く」ことの意義

以上の考察を踏まえつつ、ここで改めて冒頭近くの叙述を確認しよう。

僕は、その厚い壁に触れてみたわけではない。しかし、壁はしつかり閉ざしてい、僕らを監禁していた。それは確かなことだ。僕らは、一種の強制収容所にいたのだが、決してその粘液質の透明な壁に、深い罅をいれて逃亡しようとはしなかつた。

先に述べたとおり、「外部がなかつた」、すなわち「監禁」されているという意識を持たなかった筈の「僕」をして、「不思議な監禁状態」にいることを「確かなこと」として認知せしめたのは、「外部」からの闖入者たる「学生」その人にほかならない。

では「学生」が去った後、「僕」はその「不思議な監禁状態」に、どのように対処しようというのか。ここで注目すべきは、「僕」が以下のような「学生」の姿を認めていた点である。

夜、個室へ戻つてからも、(略)鉛筆を細く尖らせ、せつせと短い文章を書いていたが僕は全く興味のないふりをしていた。

「全く興味のないふりをしていた」という言辞は、彼がその実「興味」を惹きつけられていたことを端的に証づける。「僕」は「外部」に向かって「書くこと」の「積極的」な意義を、こうした体験を通して理解したと考えられるのである。

「自殺」という破滅的な方法を選ぶのではなく、また「睡眠薬」に頼ることで自己の圏域という「内部」に留まるでもなく、[30]「絶望」に甘んじず、「強制収容所」の「壁」の「外部」を志向して「書く」ということ。[31]それこそは「粘液質の壁」に再び「罅」を入れ、破ろうとする行為にほかならない。単に「ぼくら日本の若い人間たちが、あいまいで執拗な壁にとじこめられてしまっているというイメージ」[32]を形象化した「消極的、否定的」な作品とも見紛う「他人の足」において、しかし「強権にかもす志」[33]は、まさに「書く」という行為において貫かれているのである。

注

(1) 選評の引用は、『芥川賞全集』第五巻(文藝春秋、一九八二・六、四八七～四九五頁)に拠った(初出は『文藝春秋』一九五八・三)。

(2) 柴田勝二『大江健三郎論――地上と彼岸――』(有精堂、一九九二・七、九頁)。柴田のいわゆる「閉じ込められることを受容する心性」に関して、奥野健男は「彼〔=大江〕はオナニスム的発想によって、自己の存在を確認し、オナニスム的夢想によって、世界をとらえなおそうとする」(「大江健三郎の文学と性」、『文學界』一九六三・二)と論じている。

(3) 中村泰行『大江健三郎――文学の軌跡』(新日本出版社、一九九五・六、三二頁)

(4) 石川巧「カリエスの亜空間――大江健三郎「他人の足」論――」

（『山口国文』第一七号、一九九四・三、六一頁、および七二～七三頁）

（5）高橋由貴「私的世界の失効 大江健三郎「他人の足」における「壁の噂」の両義性――」（『日本文芸論叢』第二八号、二〇〇三・一一、五〇頁）

（6）村松剛・佐伯彰一・奥野健男「座談会 横光利一と大江健三郎」（『文學界』一九六二・四）における佐伯の発言。

（7）四方朱子「「他人の足」――当事者であるということ」（『日本研究』第六〇号、二〇二〇・三、一四七頁）

（8）鈴木恵美「大江健三郎『他人の足』論――「僕」の〈意識〉をめぐって」（『国文目白』第四八号、二〇〇九・二、八一頁）

（9）大島丈志「「他人の足」における脊椎カリエスの境界線」（『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』第一八四号、二〇〇九・三、四五頁）

（10）脊椎カリエスをめぐる時代的状況と「他人の足」との関係については、注（9）大島前掲論に詳しい。

（11）この「看護婦」という存在について、山本昭宏『大江健三郎とその時代「戦後」に選ばれた小説家』（人文書院、二〇一九・九、五八頁）は、「彼女たち」が「おしなべて主体性を感じさせない描かれ方をしている」点に注目し、「共同体が、自らを維持するために階層秩序の下位の層を内部に必要としていることが、はっきりと問題化されているわけではない。しかし、それへの関心が、小説家としての出発時から大江にはあった」と論じている。ただし、ここでより重要なのは、フィクションにおける従来的な「看護婦」のイメージが、「他人の足」においても踏襲されている、という点ではないか。レスリー・A・フィードラー「フィクションと大衆文化に見る看護婦のイメージ」（美馬達哉訳）は、「看護婦」が「一糸纒わぬ男性の裸体に触れ、取り扱い、操作することを特権づけられ、時には求められたりする」ことから、「少なくとも男性の淫らな空想のなかでは、たんに性的に望ましいばかりか、いつでも喜んで身を任せると思われている」（アン・ハドソン・ジョーンズ編、中島憲子監訳『看護婦はどう見られてきたか 歴史、芸術、文学に『おけるイメージ』時空出版、一九九七・七、一〇四頁）と指摘している。

（12）注（5）高橋前掲論、四五頁。

（13）注（4）石川前掲論、六八頁。

（14）『われらの時代』（書き下ろし、中央公論社、一九五九・七）や『遅れてきた青年』（『新潮』一九六一・九～一九六二・二）など、大江の小説においては、ホモソーシャルな集団における「勇気」の駆動とその挫折の様態が、しばしば描出されている。

（15）ミシェル・フーコー「真理と裁判形態」（西谷修訳、小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション 6 生政治・統治』ちくま学芸文庫、二〇〇六・一〇、一三四頁）は、「工場、学校、精神病院、病院、監獄」などの施設について、「その第一の目的は、諸個人を人間の規範化装置に固定すること」であると論じている。これを敷衍すれば、本作の「僕ら」が暮らす「病棟」でも、「カリエスの子供たち」を「正常な人間」たらしめるための「規範化装置に固定すること」が目指されており、看護婦は「自殺未遂の少年」に対して、そうした「規範化」のための処置を無理に当てがおうとしている、と評し得よう。

（16）なお当該のくだりは、現行版の『ヒロシマ』（増補版、石川欣一・谷本清・明田川融訳、法政大学出版局、二〇〇三・七、五九頁）では、以下のように訳出されている。「対岸の少し高目の砂州に着いて、ぬるぬるの生身を抱いて舟から出し、潮のこない斜面まで運び上げたが、「これはみんな人間なんだぞ」と、何度も何度も、わざわざ自分にいいきかせなければ、とても我慢ができかねた。」

（17）ジョルジュ・バタイユ『ヒロシマの人々の物語』（酒井健訳、景

文館書店、二〇一五・三、一八頁）。強調はバタイユ原文。

（18）大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、一九六五・六、一八五頁）

（19）注（18）大江前掲書、一一一頁。

（20）注（18）大江前掲書、一一四頁。

（21）村上克尚「動物とファシズム――大江健三郎「奇妙な仕事」論」（『日本近代文学』第七九集、二〇〇八・一一、一一七頁）。本稿の執筆に際して、同論および村上克尚『動物の声、他者の声 日本戦後文学の倫理』（新曜社、二〇一七・九）からは、多くの有益な示唆を得た。

（22）村上克尚は、注（21）の論文において、当該の用語について「本稿ではひとまず、「時に異分子のジェノサイドにまで至る、社会の暴力的な同質化の運動」という意味で、この語を理解しておくことにしたい」と定義づけている。これに関連して、「戦後世代のイメージ」（『週刊朝日』一九五九・一・四～二・二二）には「一人の悪意にみちた他人が多くの人びとにある特定の傾向のある頭をのっけさせたとしたら、そしてそれら善良で怠けものの人びとを、その特定の傾向のままに動かしはじめたらどうなるか。／この悪意にみちた他の一人は、ドイツの政治家で一千万に近いユダヤ人を殺したヒットラーという男であるのだから」という記述が見受けられるが、大江自身による「ファシズム」という語の定義はいささか曖昧である。この点については、今後の課題としたい。

（23）この点については、福間良明『「戦争体験」の戦後史 世代・教養・イデオロギー』（中公新書、二〇〇九・三）に詳しい。「戦争体験」に関しては、殊に一九六〇年前後から「戦中派世代」と「戦無派世代」との懸隔が露見化し、「怒れる若者たち」の一員たる大江自身も「二十歳の日本人」（初出未詳）や「ぼく自身のなかの戦争」（『中央公論』一九六三・三）等のエッセイで、そうした議論に介入している。一方で「他人の足」に描出されているのは、世代を同じくする者同士の「戦争」に対する見解の相違であり、そうした相違は「外部がなかつた」と述懐している「僕」が、そもそも「戦争体験」自体を所有していないことに起因すると思しい。「戦争」に対する意識を描くという点では、『遅れてきた青年』（『新潮』一九六〇・九～一九六二・二）等の作品も想起されるが、そうした意識のありかたは、「他人の足」の「僕」や「学生」とは大きく異なっている。本作のような事例は、まさしく『遅れてきた青年』や『われらの時代』において描出される（世代論的）「戦争観」を相対化して捉える視座を提供している。

（24）大江健三郎「徒弟修行中の作家」（『朝日新聞』一九五八・二・二）。梶尾文武「大江健三郎ノート 第1回・第1章 一九五四年の転向」（『文学＋』第一号、二〇一八・一〇）は、「火山」（『学園』一九五五・九）、「偽証の時」（『文學界』一九五七・一〇）、「報復する青年」（『別冊文藝春秋』一九六〇・一）、ならびに「後退青年研究所」（『群像』一九六〇・三）成立の背景に「三・一四事件」（全学連学生らによって警察のスパイだと疑われた学生が拉致・監禁された事件、ならびにそれに起因する学生の逮捕と裁判といった一連の出来事を指す）があることを論証しているが、これらの作品では、まさしく「あいまいに閉ざされているために、しだいにリアリスチックな判断力や分析力が衰退したあげく、持続的なエネルギーもうしなって怒りっぽく非論理的になった若い精神」のありよう、すなわち「ファシズム」的状況が描出されていると評し得る。なお大江は「奇妙な仕事」（『東京大学新聞』一九五七・五・二二）が五月祭賞を受賞した際、「全学連の指令したストライキ」において「東大の文学部の学生が出したビラの文章の非論理と不正確な事実の伝え方」、そして「一部の学生たちの討論の仕方の煽動的な無責任さ」（「受賞の言葉」）を批判している。

(25) この少年が「複雑な方法で自殺未遂」をしたことは、示唆的である。たとえば『万延元年のフットボール』(『群像』一九六七・一〜七)の冒頭付近で、蜜三郎の友人が「朱色の塗料で頭と顔をぬりつぶし、素裸で肛門に胡瓜をさしこみ、縊死」を遂げたことが示されている。両者は、自殺の方法に関する叙述によって、他者にとって不可知の内部を抱えていることが強調される点で共通している。

(26) 注(4)石川前掲論、六九頁。

(27) 関連する記述として、これ以前に「僕」は「自殺未遂の少年」に対し、「僕の萎びて赤んぼうの腕みたいな足をね、大きい吸血鬼がせつせと吸うと思うと、おかしいし、恐くて、躰がばらばらになりそうだつた」と語っていた。他者の身体の一部を消費の対象とする点において、「一人の少年」と「吸血鬼」は類似的に描出されている。

(28) 注(7)四方前掲論、一四七頁。

(29) 野口武彦『吠え声・叫び声・沈黙 大江健三郎の世界』(新潮社、一九七一・四、二七頁)。傍点は原文。

(30) 高橋由貴は前掲の論文で、こうした「自殺」と「睡眠」という、半ば無理矢理に「他者から自己を確保し、私的世界を堅持する」方法に関して、「テクストではネガティヴに仄めかされていよう」(五一頁)と指摘している。

(31) これに関連して、『芽むしり仔撃ち』(講談社、一九五八・六)には「僕は閉じこめられていたどんづまりから、外へ追放されようとしていた。しかし外側でも僕はあいかわらず閉じこめられているだろう」(第十章 審判と追放)との記述が見受けられる。ただ「脱出してしまうことは決してできない」(同前)としても、まさしく「閉じこめられている」ことそれ自体に対する「僕(ら)」の告発として、同作は読まれ得よう。

(32) 大江健三郎「徒弟修行中の作家」(前掲)

(33) 大江健三郎「強権に確執をかもす志」(『世界』一九六一・七)

※大江健三郎「他人の足」からの引用は、初刊本である『死者の奢り』(文藝春秋新社、一九五八・三)に拠った。

(ふくだ・りょう 県立広島大学講師)